

ダニエル書 - 第七十二号

預言的な結びつき：古代イスラエルの分裂からアメリカ合衆国の終焉まで

Jeff Pippenger

2024-02-05

ヤロブアムの反逆の証しは、また古代イスラエルが二つの国に分裂した歴史でもある。十部族から成る北王国はイスラエル、あるいは時にエフライムと呼ばれ、南王国はユダと呼ばれた。エゼキエルの時代には、イスラエルはすでに長年、二つの王国に分かれており、エゼキエル書三十七章で、二つの王国が再び一つの国となることを示す預言が彼に与えられた。この預言は地の獣（アメリカ合衆国）の初期の歴史において成就し、またアメリカ合衆国の終わりにおいて最終的に成就する。というのも、イエスは常に物事の終わりをその始まりによって示すからである。

イスラエルが二つの王国に分裂した時のヤロブアムの反逆は、アメリカ合衆国の始まりにおける反逆をも、終わりにおける反逆をも表している。アメリカ合衆国の始まりと終わりの反逆には、二つの王国の結合が含まれている。これらの記事でホワイト姉妹の著作から繰り返し引用してきたように、黙示録第十八章は教会への二つの呼びかけを表している。日曜法の危機の時に結び合わされる二つの民とは、十四万四千人と、なおバビロンにいる神のほかの群れである。

ミラー派の歴史において結び合わされた二つの国は、ユダとエフライムであった。二つの王国に対するそれぞれの怒りが、1798年、そして1844年に終わったときに、彼らは結び合わされた。エゼキエル書三十七章にある「moreover」という語によって、私たちはこの適用が確実であると確信できる。「moreover」という語は、「moreover」に続くメッセージを、その語の前にあったメッセージの上に重ねることを意味する。

主の言葉が再び私に臨み、こう言われた。「さらに、人の子よ、一つの棒を取り、その上に『ユダと、その仲間であるイスラエルの子らのため』と書け。次に、もう一つの棒を取り、その上に『ヨセフ、すなわちエフライムの棒のため、またその仲間であるイスラエルの全家のため』と書け。そして、それらを互いに合わせて一本の棒とせよ。そうすれば、それらはあなたの手のうちで一つとなるであろう。」エゼキエル書 37:15-17.

エゼキエルは「さらに」と述べる時、反復と拡大という預言の原則を適用している。エゼキエルは二本の棒を取り、一方をユダのために、もう一方をエフライムのためにし、その二本の棒で示される預言を先の預言の上に重ね合わせるのである。先の預言的な描写は、エゼキエルが干からびた死骨の谷に連れて行かれたとき、1節で始まった。

主の御手が私の上であり、主の霊によって私は連れ出され、骨で満ちた谷のただ中に下ろされた。彼は私をそれらの周囲に巡り歩かせた。見よ、開けた谷には非常に多くの骨があり、しかもそれらはひどく乾いていた。彼は私に言った、「人の子よ、これらの骨は生きることができるか」。私は答えた、「主なる神よ、あなたがご存じです」。彼はさらに私に言った、「これらの骨に向かって預言し、彼らに言え、『乾いた骨よ

、主のことばを聞け. 主なる神はこれらの骨にこう言われる. 見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れ、あなたがたは生きる. わたしはあなたがたに筋を与え、あなたがたに肉を生じさせ、皮であなたがたを覆い、あなたがたのうちに息を入れる. するとあなたがたは生き、わたしが主であることを知る』」。私は命じられたとおりに預言した. 私が預言していると、音がして、見よ、震えが起こり、骨と骨がそれぞれ相手に合わさって集まった. 私が見ていると、彼らの上に筋と肉が生じ、その上を皮が覆った. しかし、彼らの中には息がなかった. そこで彼は私に言った、「風に向かって預言せよ. 預言せよ、人の子よ. 風に言え、『主なる神はこう言われる. 四方の風よ、来たれ. 息よ、これらの打ち殺された者の上に吹きつけよ. 彼らが生きるように』」。私は彼が命じたとおりに預言した. すると息が彼らの中に入り、彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった. 非常に大いなる軍勢であった. 彼は私に言った、「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である. 見よ、彼らは言っている、『私たちの骨は乾き、望みは失われ、私たちは断ち切られた』と. だから、彼らに向かって預言して言え、『主なる神はこう言われる. 見よ、わが民よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く. わが民よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたはわたしが主であることを知る. わたしはわたしの霊をあなたがたのうちに置き、あなたがたは生きる. わたしはあなたがたをあなたがた自身の地に住ませる. そのとき、主であるわたしが語り、それを成し遂げたことを、あなたがたは知る』と」と主は言われる. エゼキエル書 37章1-14節.

これらの記事の当初から、私たちは、死んだ骨の谷が終末の時代における神の民を表していること、そして彼らを強大な軍勢として自分の足で立たせる四つの風のメッセージが、第三の災いのイスラムを特定する真夜中の叫びのメッセージであることを示してきた. シスター・ホワイトは、その骨を神の民だと述べている.

「私は筆を置き、魂を主に向けて祈る. 主が、干からびた骨のようなご自身の背教の民に息を吹きかけ、彼らが生きるように。」総会会報、1893年2月4日.

私たちは以前の記事で、2020年7月18日を特定する預言的メッセージが誤っており、その虚偽の宣言が、十人の乙女のたとえにおける第一の失望と遅延の時の到来を告げるものとなったことを示してきた. ミラー派の時代には時の宣言は正当であったが、1844年以降、時の設定に基づくメッセージが再び掲げられることは決してなかった. フューチャー・フォー・アメリカが2020年7月18日を宣告したとき、彼らは時の宣言が容認されていた歴史へと後退し、そのことによって罪を犯し、黙示録第11章の大いなる都の通りで打ち殺された. 通りで死んだ彼らは、その後、三日半の後に二人の証人がそうであったように、復活する必要があった.

干からびた骨は、死者の中からの復活のように行動を起こすため、神の聖霊によって息を吹きかけられる必要がある. 聖書訓練学校、1903年12月1日.

これまでの記事で、二人の証人をよみがえらせる「四つの風」のメッセージが、「第三の災い」におけるイスラムのメッセージであり、そのメッセージこそが終わりの時の「真夜中の叫び」のメッセージであることを示してきた. エゼキエルは「さらに」と言い、そうすることで、真夜中の叫びの宣べ伝えを描写する歴史において、エフライムを表す

一本とユダを表す一本からなる「二本の棒」が結び合わされ、一つの国民となるべきことを示した。十人の乙女のたとえは、ミラー派の歴史において成就したとおりに、終わりの時にも「文字どおり」成就する。ミラー派の歴史で真夜中の叫びが成就した時期に、そして終わりの時の成就において再び、「二本の棒」は結び合わされたし、また結び合わされるであろう。

二本の棒は、古代イスラエルの北王国（エフライム）と南王国（ユダ）を表していた。私たちはまた、ウィリアム・ミラーがエリヤに象徴されていること、そして干ばつの三年半の間にエリヤがザレファテのやもめのもとへ行っていたことも示した。

主の言葉が彼に臨み、こう言った。「立って、シドンに属するザレファテへ行き、そこに住め。見よ、そこであなたを養うよう、ひとりのやもめの女に命じてある。」そこで彼は起きてザレファテへ行った。彼がその町の門に着くと、なんと、ひとりのやもめの女がそこで小枝を集めていた。彼は彼女を呼んで言った。「どうか、器に水を少し汲んで持ってきて、私に飲ませてください。」彼女が取りに行こうとすると、彼はさらに彼女を呼んで言った。「どうか、手にパンを一切れ持ってきてください。」彼女は言った。「あなたの神、主は生きておられます。私はパンを持っていません。ただ、かめに一握りの粉と、つぼに少しの油があるだけです。今、私は小枝を二本集めています。それを家に持ち帰って私と息子のために調理し、それを食べて、そして死のうと思っています。」エリヤは彼女に言った。「恐れるな。あなたの言ったとおりに行きなさい。ただし、まずそれで私のために小さなパンを一つ作って、私のところに持ってきなさい。その後で、あなた自身とあなたの子のために作りなさい。イスラエルの神、主はこう言われる。主が地の上に雨を降らせる日まで、粉のかめは尽きることがなく、油のつぼも絶えることはない。」彼女は出かけて、エリヤの言葉のとおりにした。こうして彼女と彼、そして彼女の家は、幾日も食べ続けた。列王記上 17:8-15。

この箇所「多くの日々」とは、アハブがエリヤを捜し求めた三年半のことであり、教皇制による一千二百六十年の迫害を象徴していた。教皇制による迫害の「多くの日々」について、イエスはこう言われた：

そして、もしその日々が短くされなければ、だれ一人として救われる者はいない。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。マタイ 24:22。

ホワイト姉妹は、イエスの「その日々」という言明を、教皇制による迫害の期間だと直接特定している。

教会に対する迫害は、1260年の全期間にわたって続いたわけではなかった。神はご自分の民をあわれみ、その苛烈な試練の時を短くされた。教会に降りかかる「大患難」を予告して、救い主は言われた。「その日々が短くされなければ、いのちのある者はひとりも救われない。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。」マタイ 24:22。宗教改革の影響により、迫害は1798年以前に終結した。『大論争』266、267ページ。

エリヤがやもめに養われていた「多くの日」は、ダニエルが示した教皇による迫害の「多くの日」でもあった。

そして、民のうちの賢明な者たちは多くの者を教え導く。だが彼らは多くの日のあいだ、剣と火、捕囚と略奪によって倒れる。彼らが倒れるとき、わずかな助けが与えられるが、多くの者がへつらいをもって彼らに付き従う。さらに、賢明な者たちのうちの幾人かは倒れ、彼らを試し、清め、白くするためであり、それは終わりの時に至るまで続く。というのは、なお定められた時のためだからである。ダニエル書 11:33-35

「終わりの時」は、これらの節にある「定められた時」でもあり、1798年であって、ザレファテのやもめと共に過ごしたエリヤの時によって象徴されていたとおり、教皇権による迫害の終わりを画した。その歴史において、やもめは、夫を持たない教会を表し、『ヨハネの黙示録』第12章の荒野の教会とされていた。彼女は一本でも十本でもなく、二本の枝を集めていた。エゼキエルは二本の棒を取り、その一本をイスラエルの北王国のために、もう一本を南王国のために取り、それらを合わせて一本の棒にするよう命じられていた。その二つの王国はどちらも2520年間散らされていたが、神の約束は、神が彼らを集めるというものであった。その女は、ひとつに結び合わされるはずの二本の枝を集めており、そしてそれを「主が地に雨を降らせるその日まで」行っていた。

主が「雨」を降らせたその日は、ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」を指し示しており、それは、契約の使者が、1798年（最初の憤りの終わり）から1844年10月22日（最後の憤りの終わり）に至るまでに建て上げられていた宮に突然来られた、1844年10月22日に結末に達した。その期間に、エゼキエルの「骨の谷」のたとえで表された真夜中の叫びのメッセージが成就した。すなわち、北王国と南王国の二本の棒が結び合わされて、一人の王をいただく一つの国となったときである。というのも、1844年10月22日に、キリストが御父の御前に来て御国を受け取られたからである。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

キリストは、ダニエル書に示されているとおり、1844年10月22日に王国を受けた。

私は夜の幻の中に見た。見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のもとに来た。彼はその方の前に導かれた。彼に主権と栄光と国が与えられ、すべての民、諸国、諸言語の者が彼に仕えるようになった。彼の主権は永遠の主権であって、過ぎ去ることがなく、その国は滅ぼされることはない。ダニエル書 7章13、14節。

エゼキエルの二本の棒が一つに結ばれると、彼らの上には一人の王がいる。

また、わがしもべダビデが彼らの上に王となり、彼らはみな一人の牧者を持つ。彼らはわたしのおきてに歩み、わたしの定めを守り、それを行う。彼らは、あなたがたの先祖が住んだ、わがしもべヤコブに与えた地に住む。彼らはそこに、彼ら自身も、その子らも、その子らの子らも、とこしえに住む。わがしもべダビデは、とこしえに彼らの君となる。エゼキエル書 37:24、25。

すべての預言者は互いに一致しており、王ダビデは、1844年10月22日に御父の御前に来られ、イスラエル（北王国）とユダ（南王国）の二本の木片から集められて一つにされた王国を受けられたキリストである。キリストが荒廃し踏みにじられていた神殿を再興されたので、1798年から1844年に至る46年間に、二つの王国の離散は終わった。その神殿を再興されたとき、主はマラキ書第3章のとおり、契約の使者として、突然ご自分の神殿に来られた。エゼキエルもそれと一致している。というのも、すべての預言者は互いに一致しているからである。

わたしのしもべダビデは彼らの上に王となり、彼らは皆ひとりの牧者を持つ。彼らはまた、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守ってそれを行う。彼らは、わたしのしもべヤコブに与え、あなたがたの先祖が住んだ地に住む。彼ら自身と、その子どもたち、その孫たちも、永遠にそこに住む。わたしのしもべダビデは、永遠に彼らの君となる。さらに、わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約である。わたしは彼らを住ませ、彼らを増やし、わたしの聖所をとこしえに彼らのただ中に置く。わたしの幕屋もまた彼らとともにあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。エゼキエル書 37:24-27。

神殿を建てるのはキリストである。

彼に言え。「万軍の主はこう言われる。『見よ、その名を「若枝」という人がいる。その人はその所から生え出て、主の宮を建てる。まことに彼こそ主の宮を建て、栄光を帯び、自らの王座に着いて治める。彼はその王座にあつて祭司ともなり、この二人の間には平和のはかりごとがある。』その冠は、ヘレム、トビヤ、エダヤ、またゼパニヤの子ヘンの記念として、主の宮に納められる。遠くにいる者たちが来て、主の宮の建築に携わる。こうして、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを、あなたがたは知るようになる。あなたがたの神、主の御声に努めて従うなら、このことは成就する。」ゼカリヤ書 6:12-15。

キリストは若枝であり、彼は、彼らのご自分の神殿を壊したなら、三日でそれを建て直すと言われた。するとユダヤ人たちは、神殿を建てるのに四十六年かかったのだと答えた。

そこでユダヤ人たちは答えて彼に言った。「あなたがこれらのことをしているのだから、私たちにどんなしるしを示すのか。」イエスは答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日のうちにそれを建て直す。」するとユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかったのに、あなたはそれを三日のうちに建て直すというのか。」ヨハネの福音書 2:18-20

その箇所ではキリストはご自身のからだについて語っておられたが、すべての預言者は自分たちの生きていた時代よりも終わりの時について多く語っている。三日目におけるキリストの復活は、真夜中の叫びにおける聖霊の注ぎの中での死んだ骨の復活を象徴していた。エリヤの証しの主題である雨は、バアルとアシュタロテの預言者たちとの対決の最高潮のときに現れた。そのとき、エリヤの神こそ真の神であり、またエリヤが真の預言者であることが示された。

最初の失望が到来したとき、プロテスタントが、バアルとアシュタロテの預言者に象徴される偽預言者となってしまったことが明らかになった。その後、待機の時が始まり、「真夜中の叫び」のメッセージへとつながり、それによってキリストが突然ご自身の神殿に来られることへと導かれた。この「真夜中の叫び」は、骨を立ち上がらせて強大な軍勢とするエゼキエルのメッセージによって表されている。さらに、その期間（46年）のあいだに、二本の杖が一つに結び合わされ、一人の王のもとに一つの国民となるはずであった。

主の言葉が再び私に臨み、こう言った。さらに、人の子よ、一本の棒を取り、それにこう書け。「ユダのため、そしてその仲間であるイスラエルの子らのために」。それから、もう一本の棒を取り、それにこう書け。「ヨセフのため、すなわちエフライムの棒、またその仲間であるイスラエルの全家のために」。そして、それらを互いに合わせて一つの棒とせよ。そうすれば、あなたの手の中で一つとなる。あなたの民の子らがあなたに、「これらはどういう意味か、私たちに示してくれないか」と言って語りかけるとき、彼らに言え、「主なる神はこう言われる。見よ、わたしはヨセフの棒、すなわちエフライムの手にあるものと、その仲間であるイスラエルの諸部族を取り、それらをユダの棒と合わせて一つの棒とし、彼らはわたしの手のうちで一つとなる。」あなたが書きつけたそれらの棒は、彼らの目の前で、あなたの手の中にあるだろう。さらに彼らに言え、「主なる神はこう言われる。見よ、わたしは、彼らが行ってしまった諸々の国民の間からイスラエルの子らを取り、四方から彼らを集め、彼らの土地へ連れ戻す。わたしは彼らを、イスラエルの山々の地で一つの国民とし、彼らすべての上に一人の王を王として立てる。彼らはもはや二つの国民ではなくなり、二つの王国に分かたれることも、もう決してない。彼らはもはや、自分たちの偶像によっても、忌むべきものによっても、どのような背きによっても、自らを汚すことはない。むしろ、わたしは、彼らが罪を犯したすべての住まいから彼らを救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。」エゼキエル書 37:15-23。

真夜中の叫びのときのエリヤの雨に先立って、やもめが集めていた二本の小枝とは、散らされていたイスラエルの北王国と南王国のことであり、反型の贖罪日が始まった1844年10月22日に一つの国民へと集められるはずのものだった。というのも、その時に神が「彼らを清める」と約束されたからである。調査審判を表すこの清めは、その時に始まった。この二本の小枝の集めは正しく理解されなければならない。なぜなら、神は常に物事の終わりをその始まりによって示されるからである。

1844年はイスラエルの二王国の終わりであった。というのも、その時には彼らは一つの王国、すなわち霊的イスラエルとなっており、その時点からはただ一つの民であることになっていたからである。その歴史は、彼らが二つの国に分かれた当初の歴史、すなわちヤロブアムの反逆の歴史によって例証されている。

ヤロブアムの偽りの礼拝制度の歴史は、彼の王国の終わりにおいても例証されなければならない。古代イスラエルの初めにおけるアロンの反逆と、北王国の初めにおけるヤロブアムの反逆は、1863年の反逆を表している。そして、二本の棒の結合によって表されるヤロブアムの王国の終わりが、1863年の上に重ね合わされるときにのみ、1863年は明確に理解される。そのとき、1863年がねたみの像を立てた一世代として表されていることがは

つきりと見える。

次回の記事でこの研究を続けます。

しかし、この干からびた骨の比喻は、世に当てはまるだけではない。大いなる光にあずかった者にも当てはまる。彼らもまた、谷の骸骨のようだからである。彼らは人の形、からだの骨組みは持っているが、霊的ないのちはない。だが、このたとえば、干からびた骨がただ人の形に結び合わされただけのところで終わらない。肢体や容貌の均整があるだけでは十分ではないからである。いのちの息がそのからだに吹き込まれ、直立し、活動へと踏み出すように生かされねばならない。これらの骨はイスラエルの家、神の教会を表しており、教会の希望は聖霊のいのちを与える御働きにある。主が干からびた骨に息を吹き込み、それらが生きるようにしてくださいさねばならない。

神の御霊は、その命を与える力とともに、すべての人の内におらねばならない。そうしてこそ、あらゆる霊的な筋肉や腱が働くのである。聖霊、すなわち神の息がなければ、良心は鈍麻し、霊的ないのちは失われる。霊的ないのちを持たない多くの者は教会の名簿には名を連ねているが、小羊のいのちの書には記されていない。彼らは教会には連なっているかもしれないが、主には結び合わされてはいない。彼らは定められた一連の務めの遂行には勤勉で、生きている者と見なされるかもしれない。しかし、「あなたは生きているという名を持っているが、死んでいる」と言われる者たちのうちに多くがいる。

魂が真に神に立ち帰るのでなければ、神のいのちの息がその魂を霊的ないのちに生かすのでなければ、真理を公言する者たちが天来の原則に動かされるのでなければ、彼らは永遠に生きてとどまる朽ちることのない種から生まれた者ではない。彼らがキリストの義を唯一の拠りどころとして信頼せず、その品性を見習い、その霊にあって労しないなら、彼らは裸であり、彼の義の衣をまとっていない。死んだ者が生きている者として見なされることはしばしばある。というのも、自分の考えに従って自分たちの言う「救い」を成し遂げようとしている者たちのうちには、神が御心のままに志させ、行わせるために働いておられないからである。

「この種の人々は、エゼキエルが幻の中で見た干からびた骨の谷によってよく象徴されている。」 Review and Herald, 1893年1月17日。